

浄

monthly
JŌDO

土

5

May 2007





聖道門というは、穢土にして

煩惱を断じて菩提に至るなり。

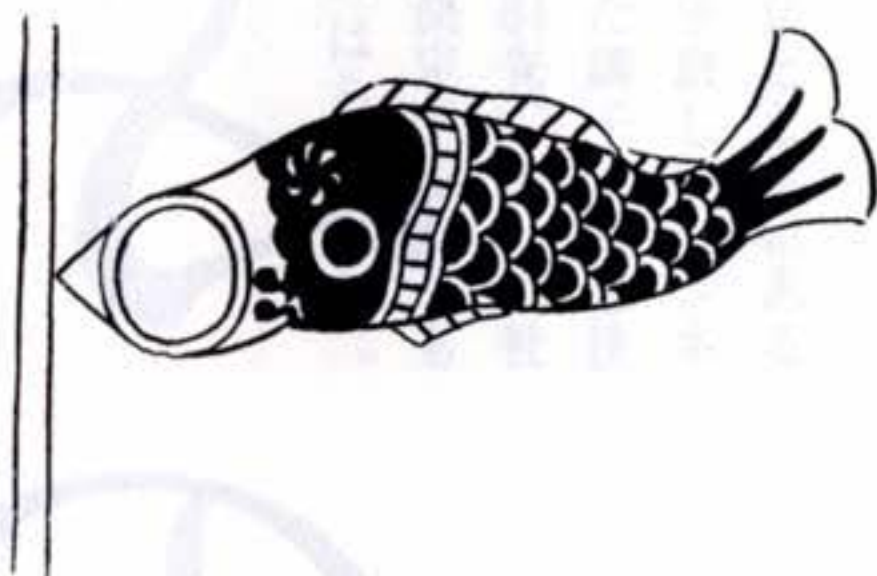
浄土門というは、浄土に生まれて、

彼かしこにして煩惱を断じて菩提に至るなり。

浄土

2007/5月号 目次

あみだぶの	小島康誉	2
表紙の言葉	桜井良夫	9
梨の芯	外松太恵子	10
仏教コラム	大室了皓	17
会いたい人 笹野高史さん③	関 容子	18
総会告知		27
響流十方	小村正孝	28
江戸を歩く 第六回	森 清鑑	32
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48
表3 教えと法話	生野善應	



表紙題字＝前浄土門主 中村康隆猥下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

あみだぶの

小島康誉

浄土宗僧侶・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構代表、客員教授

あみだぶの

はからいうれしあさめざめ

おもわずとなう

南無阿弥陀仏

今日も目がさめました。ありがたいことです。

法然さまの御教えにみちびかれ、十声となえて眠りにつきましたが、肉体的には目覚めることが確約されているわけではなく、さめたことは誠にありがたいことです。新しくいただいたこの命を今日も使わせていただきます。

昨日、介護保険の被保険者証が送られてきました。そんな歳となりお念仏とともにある幸せを感じています。こんな穏やかな日々は嘘のようです。一昔前まで競争激しいビジネスの世界に身をおく経営者でしたので。その頃は、十五分にひとつといった調子で意思決定していました。社員数百人の上場企業。お客様、株主、社員の家族や取引先、そして社会への責任を背負いながらの意思決定。真剣そのものでした。今でも意思決定することもありますが、せいぜい一日に一回、しかも阿弥陀さまの掌の上ですから迷いはありません。

霊鷲山にて

仏さまとの出会いはインド巡礼でした。もう二十年以上も昔のことです。

ある経営評論家主催の仏跡めぐり。経営者の方々と参加しました。

お釈迦さまがお生まれになったルンビニー、お悟りになったブッダガヤ、初めて法を説か

れたサルナートなどを巡りました。

『無量寿経』などが説かれた霊鷲山でそれは起こりました。皆様とともに説法されたとき、れる台座の周りを回っている時のことです。

およそ二千五百年前、ここで、お釈迦さまが何百、何千のお弟子方に法を説かれた。そのお釈迦さまの御教えを自分自身が聞いた、と実感し、涙が止まりませんでした。そんなことは有りえないことなのですが、お釈迦さまの御教えを直に聞いたと実感したのは事実です。「自分は仏教に縁があるのだなあ」と思いました。ツアーの主催者は東京・名古屋・大阪・福岡などで幅広く会を主宰されており、数千人の経営者が登録とか、その中で参加したのは三十人ほど。そして、宗教的体験。自分は仏教に縁がある、仏教を学んでみよう、と思いました。

会社は成長期、超多忙。どこかのお寺へはいるわけにもゆかず、悶々としていました。そんなおり、新聞広告が目にとまりました。佛教大学の通信課程です。大学入試に受からず、浪人しているうちに大学へはいることに意義を見出せず行きませんでしたので、ちょうど良いと思い入学しました。三回生になったころ疑問をもちました。自分が学びたかったのは「仏教」。しかし、教えていただくのは「仏教学」。卒論の指導教官に相談すると、「君がそこまで言うなら、もう僧侶になるしかない」とのご示唆。水谷幸正先生（当時の学長）を紹介され、得度しました。卒業後、加行課程に学び、諸師や若い方々に助けられながら、知恩院での加行もどうにか終えました。この阿弥陀さま、法然さまとの出会いが、人生を決定づけました。

加行を終えた時、二つのことを決めました。住職にならない、葬儀のお手伝いはしない。

そのような尊いことは、自分みたいな中途半端な者でなく立派な方がすべきと考えたからです。師僧からも「いろんな僧侶がいてもよい」と承諾をいただきました。

雲が行く水が流れる破れ笠　ゴロリ大の字なむ阿弥陀仏

お念仏はいつでも、どこでも、だれでもできると教えていただきましたが、なかなかできませんでした。諸事にまぎれて中々できない念仏日ぐらし。法然さまのお言葉「遊行したほうが専修念仏できるなら遊行しなさい」に諭され念仏行脚を始めました。

東海道・中山道・甲州街道などの五街道、そして数年前に鹿児島佐多岬から北海道宗谷岬まで念仏行脚日本縦断をしました。

ただただお念仏します。行く雲、流れる水、舞う蝶、そよぐ花……を友としてのこのころの旅です。凡夫の私、雑念が次からつきへと浮かんできます。そして消えていきます。いっしかお念仏とひとつになっています。いただいた握り飯をたべ大の字になれば至福の時です。遠いとおい本当に遠い。一声一声となえ、一步一步あるいて行ったら到達しました。酷暑で倒れ、強風で前に進めず、大雨に身体が凍え、食事もままならず、肩・背中・脚は痛く、宿も断られ、冷たい人情、排気ガスに頭は痛くなり、犬に襲われ……阿弥陀さまの名をとえながら一步一步進みました。一日三十キロから六十キロ。何回かに分けてですが、五十を半ばこした身には楽ではありません。十キロ痩せました。でも交通事故受難者の放り出されたお地藏さんやドライフラワーと化した供花に小僧なりのお念仏を捧げると誓ったうえは途中で止めることは出来ません。ありがたい楽しい体験でした。

一步の力を実感した三千二百キロでした。今になって思えばよくやったものです。日本

縦断が出来たのも「まず一步」を踏み出したから。挫けそうになると思い出しています。

白道をひかれおされて御名となえ はずれころんで行きつもどりつ

お念仏の道に入らせていただき約二十年。ようやく白道にたどり着きました。お念仏のおかげです。ありがたいことです。しかし、そこは凡夫。外れて転んでいます。前進ばかりとゆかず、時には戻ります。それで良いとお念仏させていただく日ぐらしです。

私のような愚かな中年新人僧は、お念仏のことも深くは分かりません。

「お任せ感謝いただきます出来るかぎりの恩返し」と頂戴しています。

法然さまが修行に修行を重ねてたどり着かれたお念仏。阿弥陀さまにお任せするだけです。有難いことも有難くないことも感謝していただきます。たいしたことなど出来ませんが、ヨチヨチと恩返しをしています。

自分なりの恩返しとして、いろんな活動をしています。そのひとつとして、日本を遠く離れたシルクロード・タクラマカン砂漠で世界的文化遺産の保護研究事業をもう二十年実践してきました。いまや私の使命です。『阿弥陀経』を訳出された鳩摩羅什三蔵法師の故郷であるクチャ郊外にのこるキジル千仏洞の修復保存活動、西域三十六国のひとつ「精絶国」に比定されているニヤ遺跡の調査研究、その西のダンダンウイリク遺跡の調査研究などです。日中両国政府や佛教大学、関係機関、多くの方々のご協力により国宝級文物多数を発掘するなど大きな成果をあげました。最近ではNHKの「新シルクロード」でも紹介されたり、「新シルクロード展」で私たちが発掘し保護処理をおこなった仏教壁画が出陳されたりしましたので、ご覧いただいた方もおられるのではと思います。私自身は研究者

ではありませんが、このような文化遺産保護研究事業を発起し、研究者を組織し、資金を提供し、実践してきました。

砂漠では、陽もあけぬうちに駱駝使いの人たちがコーランを唱えます。私はお念仏を唱えます。不思議といえは不思議な光景です。彼らも当初はいぶかりましたが、やがて納得したようです。違いを認め合うことが重要だと思います。

ほかにも人材育成や日中間相互理解促進の方面で多くの活動をさせていただきました。ありがたいことです。小僧にとっては、これもお念仏の実践です。

極楽はいずこにありや南無阿弥陀仏　いまが極楽ここが極楽

まことに愚かなこの私。智者だとは思っていませんが、それなりのことはしてきたとの自負もあります。まことに愚かなことです。法然さまの御教えにより「愚者」の入り口にたどり着きました。お念仏とともにある時、そこが極楽です。ありがたいです。ありがたいです。ありがたいです。

あとは死ぬだけのこの命。今日もお念仏の道をヨチヨチと歩いていきます。　三拝

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

念仏の道ヨチヨチと

小島康誉

東方出版

定価(一、〇〇〇円十税)



浄土宗僧侶、佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構代表、客員教授、中国新疆ウイグル自治区政府顧問。一九四二年生まれ。佛教大学仏教学科卒業。24歳で宝石の鶴亀（現社名・あずみ（株））を創業し上場企業に育て上げ、創業30周年を機に社長を退任。45歳で得度。新疆ウイグル自治区を百数十回訪問し、世界的文化財保護研究・人材育成・日中間相互理解促進で多くの活動を実践。

主な編著書に「21世紀へ生き残る企業とは」「人生の道・経営の道」PHP研究所、「命燃えて」（プラス出版）、「日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書」（中村印刷）、「シルクロード・ニヤ遺跡の謎」（東方出版）、「シルクロードに燃える」（ラジオ深夜便CD・NHKサービスセンター）、「日中共同ダンダンウイリク遺跡国際シンポジウム発表要旨」（佛大ニヤ機構）。

表紙の言葉

え
桜井良夫

5月

東京メトロ、銀座線「外苑前」の駅から表に出るとそこは、東京有数のお洒落な街、青山通り。そこから徒歩一分のところにあるのが浄土宗梅窓院である。青山の地名の元となった青山家の下屋敷内に寛永20（1643）年、建立された。大正14年から平成13年までの本堂は、現日本火災横浜ビル、元川崎銀行横浜支店などで有名な矢部又吉設計。和洋折衷様式のいわゆるモダンな鉄筋コンクリート建築で、長らく青山のシンボルであった。しかし、老朽化が進んだため、現在は、気鋭の建築家、隈研吾設計による超近代的で斬新なビルに生まれ変わり、大きな話題を呼んだ。表紙絵は孟宗金明竹の竹林参道から見える山門を描いてみた。

青山
梅窓院

梨の 芯

子どもたちの
感性に
仏さまの慈悲を

外松太恵子

青少年問題カウンセラー

「梨の芯」 金子みすゞ

梨の芯はすてるもの、だから
芯まで食べる子、けちんぼよ。

梨の芯はすてるもの、だけど

そこらへほうる子、ずるい子よ。

梨の芯はすてるもの、だから

芥箱ごみばこへ入れる子、お懶巧うろうよ。

そこらへすてた梨の芯、

蟻ありがやんやら、ひいてゆく。

「ずるい子ちゃん、ありがとよ」

芥箱へいれた梨の芯、

芥取爺ごみとりじいさん、取りに来て、

だまってごろごろひいてゆく。

日本どころか世界の国々で読まれている、
童謡詩人、金子みすゞは、山口県長門市の海
の傍で生まれ、女学校時代まで過ごしました。
生涯に「五・二編」の詩を残して二十六歳
の若さで亡くなりました。

どの詩も、研ぎ澄まされた感性和卓越した

表現力で迸はなはるように書かれています。

しかし、それだけではありません。童謡詩
という子どもの心に伝えることばの一つ一つ
は、これまで大人が気づかなかった純粹無垢
なまなざし、小さないのちへの優しさ、深さ
尊さ…、まさに仏さまのまなざしなのです。

五・二編、私は全ての詩が好きですが、も
し、ベスト一〇を選ぶならば、この「梨の芯」
は、その一つです。

―ずるい子の放り捨てた梨の芯を、蟻が見
つけました。

「あっ、ご馳走だよ、みんなおいで！」

何十匹も、いえ何百匹もの蟻たちが集まっ
て来て、大きな梨の芯を皆で力を合わせて運
んでいきました。

「エンヤラ、エンヤラ…」

（あ、よかったね）芥取爺さんが、その後
やって来たからです。

みすゞは、この小さな世界を見逃しません
でした。

子どもの行動だけを見て「いい子、悪い子……」などと決めてしまう大人たち。

宇宙の中の全ての生物の「営み」に、何一つ unnecessaryなものはないのです。

仏さまのまなざしの中には

「あなたは、あなたのままでいいのだよ」

と、その存在が認められ、必要とされているのです。

私は三十年来、青少年のカウンセリングに携わってきました。思えば、過ぎたどの年にも悲しい子どもの問題がありました。

世界を震撼とさせた、少年による幼児連続殺人事件、「殺してみたかった」と平然と高齢者を殺した事件等々……その度に、日本中の教育や医学、犯罪の専門家・識者などが、新聞、雑誌の中で、また放送、放映上で理論や解説をされてきました。しかし十年前よりも、内容も件数も、残酷化していき、その多さに人々が驚かなくなっている現状です。

いじめ、自殺、虐待……のニュースに会うた

びに、「私に今、何が出来るか、何をすべきか……」と、大人の一人として慚愧の心で一杯になるのです。

昨日のことです。テレビのニュースで、「新潟の朱鷺^{トキ}の謎の死が続いています」と言っていました。

あのトキでしうか。十年前、新潟県で人工孵化によって初めて卵から雛が誕生しました。

感動したのは、十八年間もの研究と努力の成果によるものだったからです。

そして、私は自然界の鳥たちの緻密な営みに驚きました。

親鳥の翼の下で何事もないように繰り返してきたことを、人間の力で行うとき、十八年もの歳月が必要だったのです。

翼の下で温度と湿度、時には風に触れる卵もあるため「風速」の調節。

卵の中の膜が固まらないために、親鳥は常に卵を動かしているのです。ですから一時間ごと「転卵」による傾き……「人工ふ卵器」の

中で二十日間付きつきりで、やっと成功したのでした。

周りの鳥たちを見ました。この鳩も雀も、鶏も鳥も……親鳥のおかげでした。

「蓮^{はす}と鶏^{とり}」 金子みすゞ

泥のなかから

蓮が咲く。

それをするのは

蓮じゃない。

卵のなかから

鶏が出る。

それをするのは

鶏じゃない。

それに私は

気がついた。

それも私の

せいじゃない。

『気づき』 それは私が気づくのではなく

「気づかされた」と、みすゞは言いました。

みすゞは幼い日より、お寺で仏さまのお話を聞いたり、おばあさまから膝の上で聞いて育ちました。

海の町は魚を獲って暮らす町であり、いのちに対して皆が敬虔な思いと感謝をもちながら生きてきたのでしよう。みすゞの詩作の原点だと思います。

三年前、九州で十二歳の少女が同級生をカッターナイフで刺殺しました。

加害少女について様々な角度から動機や性格・生育歴などが検討され発表されました。

その一つに『少女は抽象的なことを言語化することが苦手であった』とありました。

見えないものを感じ、表現していく目や心が育てられていなかったのでしょうか。

『積った雪』

上の雪

さむかろな。

つめたい月がさしていて。

下の雪

重かろな。

何百人ものせていて。

中の雪

さみしかろな。

空も地面もみえないで。

「中の雪」を感じる世界こそ、みずぐの世界、
仏さまの光に照らされた世界です。

（淋しいだろう……私は知っているよ）

と、私を見守っていて下さるのです。

トキの死の謎はまだ解明されていません
が、人工ふ化との関連があるのでしょうか。

ふと、十年前、英国で生まれたクローン羊
のことを考えました。同じ羊が次々と人間の
勝手な欲望で誕生していくことに戦慄を覚え
ました。まさかクローン人間は……？

「天上天下唯我独尊」 この宇宙に、唯一人
の私の尊さ、他人を羨むことも、真似をする

ことも憎むこともなく、私が今、ここに存在
していることが尊いのだと教えていただきま
した。

“子どもは育てる側によって育つ”と言われ
ますが、親が何を礼拝し、感謝して生きてい
るか、どんな価値観をもち、どんな願いを抱
いて生きているか、その姿を子どもたちは、
じっと見ています。

相談室に通所している子どもたちは、お弁
当、それも、おむすび一つでもお母さんの手
作りを持って来てもらいます。

一緒に食事をするとき、お母さんのことが
話題の中心になれるからです。

大嫌いだという母親の作って下さった玉子
焼きを、おいしそうに食べている子に

「いいなあ、Kちゃんのママの玉子焼き。私
もママがほしいなあ……」

「あんなうるさいママは嫌い！」といったK
ちゃんが心なしか優しい表情になりました。

M子は養護学級の十五歳ですが、最近不登

校なので、毎日やって来ています。

算数の能力は幼児程度ですが、会話は普通にできてコミュニケーションもとれています。

ある日、「先生、どうして『いただきます』のとき、手を合わすの?」と尋ねられました。

横で中一のSくんが、

「オレも保育園のときはそうしたよ」

私は、「そうね、お魚さんありがとう、牛乳さんアリガトウ……ってお礼を言うのよ、それから、一生懸命お米を作って下さってアリガトウ……って」

M子もSくんも、それから合掌をするようになりました。

お茶を飲むときも手を合わせて、

「先生、いただきますだよね」

何だかうれしい発見をしたように続けます。K子の横顔を見ながら、この素直さの上に何が必要なのでしょう……と、お念仏が出てきました。

この世の知恵ではなく、仏さまのお慈悲に

照らされた広大無辺の智慧の光です。

すると、ある日M子の母親が来て、うれしそうに言いました。

「ママ、お魚さんアリガトウだよって教えてくれました。先生、あの子が……あの子が私に教えてくれたんです。主人もM子の頭を撫でて『えらいね』って……先生、M子はよその子と違うって思っていたけれど、これでいいですね」

「勿論よお母さん、最高にいい子よ。私なんかより美しい心をもってるわ。そして、お母さんもお父さんも最高よ……」

私は仏さまにお会いするため、ひととき人間界に生まれさせていただきました。

そして、沢山の子どもたちに出会っています。この出会いの不思議を思うとき、「ただ念仏して」のほかなく、蟻によるこばれた梨の芯になりたいと思うのです。

外松太恵子(そとまつたえこ)プロフィール

◇1977年、北九州市教育委員会が「市立少年相談センター」を設置。その開所当初より1999年青少年とその関係者のカウンセリングにあたる。

◇その間・北九州市青少年問題協議会委員

- ・福岡県いじめ問題対策審議会委員
- ・福岡県「心のふれあい教育相談」推進委員会委員
- ・北九州市教育改革アドバイザー委員

等歴任

◇現在・福岡県アンビシャス運動「おやじ講座」専門講師

- ・「夜の子ども相談室」代表
- ・北九州市青少年問題協議会委員

※青少年問題、家庭教育、生涯学習、性教育など
幼稚園・保育園から大学まで教職員、生徒・児童へ
講演・執筆などを通して青少年の健全育成と要請に
応じてカウンセリングの実際にあたっている。

◇著書・「悩みのち晴れ」(本願寺出版社)

- ・「子どものいのち輝くとき」(樹心社)
- ・「心のポケットに」一言葉の花束をー(本願寺出版社)
- ・「金子みすず・いのちのうた」(共著)(JUCA出版社)

◇「サンデーしものせき新聞」にエッセイ連載中

◇本願寺出版社「大乘」、「本願寺新報」に掲載中

- ・「スイッチをONにして」(探究社)ほか

朝食を済ましたら急に息苦しくなった。左の胸だ。うずくまって苦しみに耐えてると、まるで拉致されるように病院へ連れられていった。

病状を聞いた医師が「レントゲン」と言い、出来あがった写真を見ていきなり「入院して下さい」と。

啞然とする私に、「肺に穴が開いています。その穴から空気が漏れ肺を圧迫して息が苦しいのです。直ぐ手術しましょう」

車椅子で病室へ運び、すぐ手術。胸部に挿入した管を器具につなぎ、三十分ほどで終わった。「一週間は絶対に管を外さないで」と言い残して皆出ていった。残されてますます息苦しく、やがて眠れぬ長い夜がやって来た。

どれだけ時間が過ぎただろうか。念仏

して耐えているうちに、今までに経験した事も無い不思議な想念が走った。

仏をすぐ側に感じたのである。そこに立っておられる…。

仏と私達は親縁・近縁・増上縁の三つの縁で結ばれている。その近縁とは、会いたいという願に応じて仏はその姿を目前に現して下さるというものだが、日課六万遍にはほど遠い私などには夢でしかなかった。なのに見えない仏が現にそこにおられる、感極まって念じているうちに、「看護して下さい」と閃いた。そして苦しみが安らいでいった。翌日には殆ど苦痛は去って、見舞いに来た家族が驚いた。

善導大師三縁の教えに目頭が熱くなった。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

六本木の自由劇場。まさに一世を風靡した『上海バンスキング』の初演は、昭和五十四年一月から二月にかけてだった。そのとき笹野さんは三十一歳。

「未だにこれ以上ヒットした芝居は出てませんね。とにかくNHKテレビのニュースで、近ごろ巷で噂の……って、コメントしたくらいだし、ほかの劇場の切符に並んでるお客同士が、ねえ、あの芝居観た？　って話題にしたほどでしたから。再演のころはお客さんが入り切らなくて、定員八十人のところに倍の百六十人入れた。押し合いへし合い立って観てて、三時間もある芝居を誰もひと言も文句言わないんですよ、七時から十時まで。開演前、路上にはまだ延々と行列ができてるんで、じゃあ、待っててくれたらもう一回やります、待っててくれますかあ、って言うと、ワァーッ、って。お客さんも役者たちも元気だったんですねえ」

初演のときの配役は、その後ずっと串田和

美の持ち役になった波多野四郎が真名古敬二で、マドンナ（正岡まどか）の吉田日出子と、バクマツ（松本亘）の笹野さんは変っていない。「斎藤憐さんが最初からぼくにあてて書いてくれて、波多野でもバクマツでもどっちでも、と言ってくれました。元々の台本は中国人の女性（リリー）と結婚した日本人（バクマツ）と、波多野とマドンナという、音楽を通じての二組のカップルが戦争に巻き込まれてゆく話ですからね。初演では串田さんは演出と美術と、小さい役三つくらい早替りして出演していました」

バクマツの名のいわれは、博打の松本からきていて、名トランペッターの南里文雄がモデルだとか。それを知ったのはこの三月に植木等さんが亡くなつて、笹野さんがテレビの取材を受けているところにたまたま私がい合せたことによる。

「植木さんとは『シカゴ』というミュージカルで御一緒したことがあって、あるときぼく



吉田日出子と「ワークNo.1」で共演する笹野さん

を呼んで、これは君が持つてるほうがいいと思うから、つて、のれんをくださったんです。開けてみると、南里文雄さんのサインを染め抜いたもので、お葬式の香典返しに配られたものなんですね。それをわざわざ植木さんが持ってきてくださるということは、ぼくのバクマツを御存じということで、とても嬉しかったです」

笹野さんのバクマツは初演当時から評判で新聞評でも絶賛され、その結果多くの演劇人の注目を集めることとなった。

「デコ（吉田日出子）はいつだって褒められてるんですが、『バンスキング』の初演に限っては朝日新聞でぼくだけが褒められました。デコさんには魔性の色気みたいなのがあった。当時みんな巻きこまれて大変だったですが、ぼくや柄本明や佐藤B作は大丈夫でした。多分、タイプじゃなかったんでしょう（笑）」

六月、第八回コクーン歌舞伎『三人吉三』に、笹野さんは土左衛門伝吉という重要な役で出る。その記者発表に行ってみると、勘三郎、福助、橋之助を中に、笹野さんと演出の串田和美が両脇にいて、ちょうどコクーン歌舞伎の、歌舞伎と自由劇場の比率を表わしているようで面白かった。

笹野さんのコクーン歌舞伎初出演は、第三回『盟さんごたいせつ三五大切』の、最初はますます坊主かみかけという小さい役だけだったのが、了心役りょうしんの幸右衛門が病気で休演して、急遽その代役も回ってきた。

「福助さんが勘三郎（当時勘九郎）さんに、お兄ちゃん、笹野さんいけると思うよ、両方とも坊主の役だし、つて。いえ、できませんよ、ますます坊主は自由劇場の延長ですけど、了心となると、つて言ったら、大丈夫、私たちもそっちへ近づくし、笹野さんもこっちへ来てくれれば、つて。勘三郎さんも同意してくださいって、何にも知らずにやってしまいま

東京ヴォードビルショーの
旗上げ公演に助っ人
出演した笹野さん



したけど、まずせりふが、ね。さてその幼名は……なんて、どう声を出すのかがわからない。渡りせりふもあつて、ショックでしたね。皆さんに迷惑かけたと思います」

でも笹野さんは立派にふた役をやりおおせた。結果として第五回の『夏祭浪花鑑』では、三河屋義平次という先代勘三郎もつとめたことのある大役が回ってきた。

「このときは勘三郎さんが考えてくださつて、歌舞伎竹本の清太夫さんのところへ義平次のせりふを習いに伺いました。歌舞伎のせりふってこういうふうに、腹から言うんだ、と思つたら、よくぞあんな了心をしてたもんだと、冷汗が出ましたよ（笑）」

私はこのときも、その後のニューヨーク平成中村座の『夏祭』も観ているが、特にニューヨークの仮設小屋で、笹野さんの義平次がヨレヨレの衣裳にみすばらしい編笠をかぶり、破れ扇をパタパタさせながら開演前の客席に現われたときは、「あ、先代！」と思つ

てしまった。

「ああ、それは先代さんのビデオをいやつて
ほど見ましたからね（笑）。それにしても、
歌舞伎の役者さんてすごいと思いますよ。蜷
川幸雄さん演出の『忠臣蔵』を、神戸のオリ
エンタル劇場柿落^{（しげふろ）}しで観たときに、みんなな
んだか形がよくなって、刀のさし方もヘンで、
日本文化に対する冒涇だよ、って思ったんで
すが、中に一人みごとに人がいたんですよ。
さしたる重い役じゃないんですが、形がなん
とも美しいんです。何が違うんだ？　って思
ったら、やっぱり歌舞伎の人だったんですね。
一朝一夕にこうはきめられない。普段の修業
が違うんですよ」

そのことは、八代目幸四郎一門と文学座が
合同公演で『明智光秀』を上演した折、きつ
と観客も、多分文学座の俳優たちも一様に実
感したろうし、また『オイディプス王』を観
世栄夫一門と青年座が合同で演じたときも、
仮面をつけたクロスたちがただ歩くのを見

するだけで、お能の人か新劇の人が一目瞭
然だった覚えがある。

さて、『三人吉三』の記者会見の日。勘三
郎以下、串田さん以外の全員が笹野さんのこ
とを「淡路屋さん」と言っているのがほほえ
ましかった。

「ええ、福助さんなんか、外部の仕事が多く
なっちゃった淡路屋さんが歌舞伎に帰ってき
てくれて嬉しい……なんて洒落で持ち上げて
くださって、わたし、いい気になっていませ
んか？　って思わず会場を見回してしまいま
したでしょ（笑）。そのあと、お子さんに将
来名前を襲名させる気はありますか？　な
んて質問が飛び出して、これは中村屋さんた
ちにも大受けしてましたよね。笹野高史って、
これ、名跡なんですかねえ」

笹野さんの結婚はかなり遅くて四十二歳の
とき。

「当時自由劇場の研究生だった子で、十七コ

も年下なんです。ぼくは四十二まで春が来ませんでした。男の子が四人生まれて、みんな芝居が好きで、ぼくと同じプロダクションにおります」

長男は現在十六歳。二歳ずつ年が違つて、上から、ささの翔太、友間、堅太、貴斗。末っ子で十歳の貴斗君は映画『武士の一分』では桃井かおりの息子で木村拓哉の甥の役を演じ、笹野さん扮する中間を相手に庭先でチャンバラごっこをして、鋭く打ちこんだりしている。

「四男は、今度は勘三郎さんと柄本明が主演で、平山秀幸監督のやじきた道中『てれすこ』という映画にも狸の役で出ています。まあ、命を助けられた狸が子供に化けて恩返しにくる、という趣向ですな」

そこで勘三郎さんに歌舞伎座の楽屋で、貴斗君の子役ぶりについて語ってもらった。

昼の部の『男女道成寺』めおとどうじょうじを踊り終えて、夜の部の錦之助襲名『口上』まで時間の余裕があ

り、珍しく椅子にゆったりとくつろいでいる。「とにかくいい子。芝居もうまいしね。狸が化けてんだけど、でもあるとき狸汁にして食べよう、って言うってたでしよ、って横眼のいやな眼つきでこつちを見る芝居なんか、お父さんそのまま(笑)。DNAだね。それで感心したのは、撮影が一段落して、子供だから庭にあるブランコのほうへ早く行きたいんだけど、でも一瞬立ち止まって、お母さんの靴をチヨチヨツと揃えて、それから駆けてくのよ、こうやって……」

勘三郎さんが椅子からパツと立ち上がると、子供がバタバタと走りながらかがんで靴を揃え、また無邪気に走り去る様子を、愉快そうに実演する。

「そういう優しい心遣いのある子供に育つてるといふのは、笹野家がいいんだね。普通、今いないよ、お母さんの靴を揃える、なんて子供は」

それから、アメリカの写真家ミック・ロッ

クが撮影したニューヨークの『夏祭』を初めとする勘三郎さんの迫力ある舞台写真集を見せてくれた。

「どう、この笹野さんの泥まみれの義平次の表情。すごいよね。向うの名うての辛口劇評家、ベン・ブラントリーが、名優ササノ、って書いたんだからね。なのに日本人が、現代劇の俳優をコクーンの『三五大切』に出したのは失敗だ、って書いたんで、ぼくはそのとき大喧嘩したんだからね。色眼鏡で物を見ちゃいけないよ。いいものはいんだから。ヨングラスで見ちゃいけないんだよ」

？ ヨングラス、って？

「サングラスの上に行くからさ（笑）。野田秀樹にそう言ったら、すごく面白がってくれた。とにかく笹野さんはすごい役者だね。本人ももしかして、映画は別として芝居に出るなら歌舞伎以外はあんまり出たくない、って心境なんじゃないかなあ（笑）」

たとえば勘三郎の与三郎、笹野高史の蝙蝠

安で『切られ与三郎』の通しとか、いろんなコンビを観てみたい。

笹野さんが言う。

「野田さんの動き回る芝居は、自由劇場を観て発想したということですし、串田さんの場合もそうだけど、歌舞伎という枠と、二人がやりたいと思っていることが、ピタッと合っちゃったんですね。それが野田版歌舞伎や串田演出歌舞伎の成功につながって、世の中の人が面白がって、評価してくれる。自由劇場時代の串田さんの作品もずうっと、オモチャ箱を引っくり返したような芝居だ、という劇評が続いてて、いいじゃない、われわれはそういう芝居してるんだし、お客さん来てくれてるんだから、と言ってたんですけど、そこへ歌舞伎のキツチリとしたストーリー性とか様式性とかが、パンと枠ではまったときに、二人ともまたよくなった。ぼくも含めて、歌舞伎とは本当に幸せな出会いだったと思いますよ」（おわり）

再会の手帖

また逢いたい男たち

関 容子

幻戯書房

定価(二、六〇〇円+税)



すごい話を聞いてしまった…!

北村和夫 安野光雅 神田伯龍 木場勝己 篠田正浩 中村富十郎 池部良 小沢昭一 黒鉄ヒロシ 五十嵐喜芳 和田誠 桂米朝 島田正吾

とっておきの話、
笑える話、
心にしみる話、13篇

幻戯書房 定価(2600円+税)

本誌連載の「会いたい人」が単行本になった。十三名のラインナップ。どの方からも、懐かしくって新しい、珍しくって面白い話を聞き出すことに成功している。本誌から十一名。桂米朝師匠と新国劇の島田正吾さんのみが他誌。著者は聞き上手、というより無類の聞かされ上手。えっ、ほんとですか。ああ、あのととき、やっぱり。といったエピソードが盛り沢山である。

「これは私の若かった日を振り返る、まるで『舞踏会の手帖』ではないかと思えてきました。劇場や映画館やコンサートホールや寄席や展覧会場に通い、心をときめかせた青春の日からの長い年月。その時々ヒーローたちに親しくお会いして、かねがねお訊ねしてみたかったことに迫り、率直に答えていただけた幸せ」

これは「あとがき」の著者の言葉である。また逢いたい男たち……副題に込められた切実な情感が胸に迫る好著。

法然上人鑽仰会

公開講演会の
お知らせ

講師
田島 栄

念仏はひとつ
念仏の声いまに

法然と親鸞

日時	平成19年6月29日（金曜日） 午後3時より4時半まで
会場	大本山増上寺慈雲閣 東京都港区芝公園4-7-4 地下鉄都営三田線「芝公園」徒歩2分 地下鉄都営浅草線・大江戸線「大門」徒歩7分 JR「浜松町」徒歩10分
会費	会員 無料 一般 千円
申し込み	会員、一般ともに不要(先着150名)
主催	法然上人鑽仰会
後援	浄土宗総合研究所

本年7月14日～31日、京都・四条・南座を皮切りに、名古屋、大阪、東京でも上演予定の、法然上人800回忌、親鸞聖人750回忌を記念した、前進座特別公演「法然と親鸞」の脚本を書かれた、田島栄先生にお越し頂き、田島先生の法然上人、親鸞聖人への思いを語って戴きます。

舞台を拝見する前に是非、お聴き戴きたいと思います。

問い合わせ先

法然上人鑽仰会

105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

電話：03-3578-6947 ファクス：03-3578-7036

尊敬と謙遜と満足と感謝と（適当な）時に教えを聞くこと、

——これがこよなき幸せである。

【『スッタニパータ』二二六五偈（岩波文庫『ブッダのことば』より）】

先日、さる寺院で山門の落慶法要が執り行われた。祝宴の席で隣り合わせたご住職は、なんと、ピアノの調律師という「もう一つの顔」を持っておられる。音楽は好きな方だが、音符すらろくに読めない筆者には、神々しい技師に映った。かつては需要の高かったピアノだが、昨今の市場はずいぶん様変わりしているといった話をうかがったあとで、羨望の嘆息をもらしつつ調律そのものについてうかがってみた。当たり前のことだが、やはり相当に難しいらしい。

羊毛や木材などの天然素材が用いられているため、寒暖の差や湿気などに弱く、時が経つにつれ、どうしても音にズレが生じてくるデリケートな楽器であることはよく知られている。そのズレを直す調律の仕事、デリケートな相手だけに、思うように進まないこともあるという。

「何時間もかかってようやく納得できる音になったときには、思わず、やった！と声を挙げたくなりますよ」

子どもにかえたような笑顔が印象的だった。そして、

「まあ、裏方の仕事ですけども」

とも。あくまで控えめに漏らされたこの言葉が、筆者の胸には響いた。

昨秋、盲目のピアニストとして知られる梯剛之氏のコンサートに行く機会を

得た。実に見事な演奏で、氏が積み重ねてきた想像の及ばない努力の結晶に、聴衆の偽りのない拍手は会場を震わせんばかりだった。

氏の努力と苦労は物凄いのだと思う。それはピアノの音色に顕れている。そして氏をはじめ、奏者は皆それを「表舞台」で披露されている。

しかしその「表舞台」は、実は人知れず調律という作業に明け暮れる人たちの、並々ならぬ努力の上にこそあったのだということが、調律師住職との会話でまざまざと気付かされたのだった。もちろん、ピアノ奏者なら誰だってそんなことは重々承知のはずだろう。盲目なのは梯氏ではない、その音色にのみ耳を傾け、夢心地で聴いていた自分じゃないか。

チェッカーフラッグを駆け抜けるF1レーサー。その陰には、メカニック以外にも、サーキットに入り切れない技術者、関係者がおそらく数え切れないほどいる。レース翌日の新聞に、彼らが大見出しで載ることはない。

真夜中、最終の新幹線が基地に入ると、始発までに仕上げなければならない整備と点検に追われる人たちがいる。熱帯夜でも、極寒の中でも、三六五日、それは繰り返される。彼らがメインで登場する鉄道会社のコマーシャルを、筆者は見ることがない。

どのような仕事であれ、そうした構造なのだろう。しかし、世は「勝ち組」がもてはやされる時代。「勝ち組になろう、負け組みはダサイ」。教育現場ですら、たとえ婉曲にでもそんな風なことを教えていまいか。あからさまに二極化した価値観は、幼い心に歪を生じさせてはいないか。

感情的発言を許してもらえらるなら、「勝ち組」などという言葉がそもそも気に入らない。誰が、どんな理由でそれを判ずるのか。「勝ち組」も「負け組」もない、そう言いたい。せいぜい向上心を刺激する可能性のある言葉でしかない。もったも、おまえが「勝ち組」の人間でないからだろと言われてしまえば、反論はできないが…。

裏方の仕事——。なるほど、そういう表現もありなのかもしれない。しかし筆者には、今一つしっくりこない。

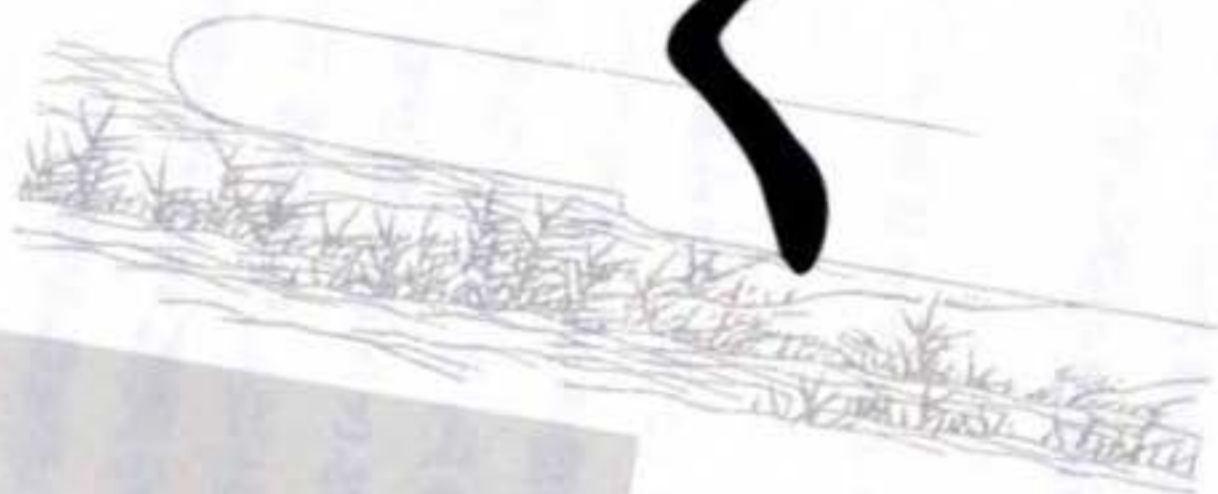
先ほどのご住職の「やった！と声を挙げたくなる」「裏方ですけど」との言葉、極めて控えめであったがゆえに、逆に偉大さを感じた。そうだ、裏方というよりは「土台」ではないか。これなくして舞台はあり得ない。

世の中は無数の土台によって支えられている。その見えにくい力に気付ければ、きっと人は少し、幸せになる。

(小村 正孝)

第六回

江戸を歩く



森清鑑

品川の宿

品川宿^{しやく}は言うまでもなく江戸四宿（新宿、千住、板橋、品川）の一つだが、江戸時代随一の賑わいを見せた町である。それもその筈、江戸と京都を結ぶ大道幹線東海道。日本橋から二里の最初の宿場であり、京都から江戸に向かつて最後の宿場である。他の宿場には見られぬ海沿いのすばらしい景色、うまい江戸前の肴。中世からここは栄えていたのである。宿の人口六千八百九十人、総家数一千五百六十一軒、本陣一、脇本陣二、そして旅籠屋九十三。品川宿は南に向かつて歩行新宿^{かちしんしゆく}、北品川宿、目黒川を挟んで南品川宿に分かれていた。北の入り口を描いた広重の絵。右手の崖は八つ山。大名行列が通る。右側に跪く宿場役人、海側の茶店の女たちは突っ立って見送っている。街道の両側に茶店や旅籠屋が軒を連ね、特に海に面した旅籠屋からは遠く房総半島まで一望。旅籠屋は飯盛女（遊女、最盛



◆問答河岸標識。前方は海



◆広重 東海道五十三次品川宿

期は千人を超えていたという」を抱え、一大遊郭と成し、旅人はおろか江戸市中から人々が集まった。

宿の入り口、海縁^{うみべり}に船の発着河岸があった。通称「問答河岸」。その名の由来は、三代将軍家光と沢庵和尚の謎かけ問答。家光は、東海寺参詣のあと、御殿山で茶会を開き、この河岸から舟に乗り、江戸城に帰った。舟に乗る刹那、家光は突如、振り返り、沢庵に向かって問うた。「海近くして東（遠）海寺とはこれいかに」。沢庵は瞬時に答えた。「大軍を率いても将（小）軍と云うがごとし」。この当意即妙の答えに家光は大笑いして乗船したという。両者は阿吽の呼吸で結ばれていたということになる。

北品川宿

有名な旅籠、遊郭は八つ山から目黒川までの歩行新宿、北品川宿に集中していた。八つ山から街道を少し南に歩くと、左、海側に、

歌舞伎「め組の喧嘩」事件の発端となる「島崎楼」（現マンション、京浜急行北品川駅近く）、さらに行くと、品川宿きつての大旅籠屋、土蔵相模（現ファミリーマート）があった。相模屋忠兵衛の旅籠屋で土蔵造りであったところから、通称「土蔵相模」。川島雄三監督の名作「幕末太陽傳」（一九五七 日活）は、土蔵相模を舞台に、落語の「居残り佐平次」と「品川心中」、宿泊・集会にここを利用していた幕末の志士たちの話を織り交ぜ、当

◆江戸名所図会 賑わう品川の宿



時の模様を巧みに演出している。フランキー堺が佐平次、小沢昭一が品川心中の金蔵、石原裕次郎が高杉晋作を演じている。座敷が海に突き出ており、江戸の人々は、風光明媚な品川沖の景色とやわらかな潮風を楽しみながら、酒を呑み、料理を味わい、くつろぐ。この風景を北斎も描いている。

御殿山

品川宿での遊興は、江戸庶民の楽しみのひとつ。宿に関係する、落語の名作がいくつか生まれている。まずは、喜び勇んで品川宿に向かう話。名人、円生が当たりをとった「首提灯」。懐があたたかい町人が品川宿でなじみの女と逢う瀬を楽しもうとやってきた増上寺参内。増上寺の四つの鐘（午後十時）がゴーン。この辺り、夜な夜な辻斬りがでるという噂。ほろ酔いかげんで謡いをうなり、威勢をつけるも、内心びくびく。暗闇の中を突然一人の武士。江戸は不案内と見え、「ちと道

を尋ねる」と武士。「もうでやがったか」と町民。真面目な武士の田舎弁に悪態をつき、挙げ句の果てにつばを吐きかける。それが武士の衣にかかったからたまらない。「我慢ならねえど」と武士。白刃が一閃。チャリンとさやに収まる。町人「なにいつていやがるんで。べらぼうめ」と云いながら品川宿に向かって歩いていると、目線がずれてくる。声がかすれてくる。俺の首の建て付けはこんなに悪いはずないんだが。変だなと感じた町人。首に手をやると血。野郎やりやがったなと気づいたときにはもう遅い。それでも、ずれてくる首を両手で抑え、歩き進むと、間の悪いことに火事に出つくわす。半鐘が鳴り、大勢の人が街道を右往左往。町人、最初は首を抱え雑踏を縫っていたが、早く品川宿に着きたい。いきなり、自分の首を掴むと前に振りかざし、「ごめんよ、ごめん」。この主人公が切られた現場は増上寺参内松原であったが、品川遊郭を目指していたのである。

蓮台ふう^{ふう}に海に突き出た座敷で、人々は酒を呑み、うまい肴を食し、美しい景色を堪能している。落語「居残り佐平次」。ある日、仲間が集まり、品川遊郭で大見世遊びを計画。だが、金がない。まかせろと兄貴分の佐平次。ともかく繰り込んだのが「土蔵相模」。その晩は芸者を揚げての乱痴気騒ぎ。翌日、仲間を帰すと、店の若い衆が勘定を取りに来る。佐平次、まとめて払うと巧みに言いくるめ、二晩、飲めや歌え。三日目の朝。再び店に催促されると、「金はねえ」。店はパニックになるが、本人しゃあしやあと無銭飲食分は働くと宣言、居残りを決め込む。ところがこの男、器用で弁が立ち、客を良い気持ちにさせて、太鼓持ち顔負けの芸を披露。ついには、客から「居残りはまだか」と引っぱりだこの有様。店の若い衆は面白くない。ついに旦那が「勘定は待つからひとまず帰れ」。ところが、佐平次。「自分は悪事を重ねた身、かくまってくれ」。旦那、びっくり仰天して逆に三十両

の熨斗^{のし}をつけて追い出す。それでも心配な旦那。若い衆にあとをつけさせると、佐平次どこ吹く風。下げは「私をおこわにかけたな（だましたな）」（江戸言葉 おおこわ。赤飯のおこわと掛ける）と旦那。佐平次「へい、旦那のオツムはごま塩です」。話の中で荒井屋から蒲焼きを取る場面があるが、美味なこ^こと江戸市中にまで聞こえた鰻屋で現在も存在する。また、佐平次が胸を患っており、療養を兼ねての話があるが、事実、この地を療養のために利用した江戸庶民もいたらしい。

落語をもう一題。「品川心中」。この話は、島崎楼または目黒川から先の南本宿の白木屋と、舞台は諸説あるようだ。品川の遊郭、白木屋で筆頭女郎を張ってきたお染めも寄る年波には勝てず、客も減り、紋日^{もんび}に必要な四十両を用立てできない（祭りなど大きな行事に女郎は着物を新調し、大勢の裏方に祝儀を配る。これができないと恥をかき、ランク下の岡場所に住み替えしなければならぬ）。勝

ち気な女性だけに、恥をかくくらいならいっそのこと死のう。でも、ひとりでは寂しい。誰か連れがいないものか。そこで思いついたのが神田の貸本屋の金蔵。ぼっとして馬鹿で助平で欲張り。あいつが死んでも別に世の中に何ら差し障りはないとの実に勝手な了見。

話巧みに誘い、ある夜、蓮台から品川の海に身投げを試みる。先に飛び込まされたのは金蔵。お染めがためらっていると、金の工面がついたとの知らせ。それなら死ぬことはないと思返し。金蔵は死んだと思つたが、気がつくと生きている。海が浅くて助かつてしまった。蓮台の下でお染めの話を聞いてしまふ。「こんちくしょう、あのあまア、どうするか見てやがれ」。親分に相談。幽霊話を仕立てて復讐を計る。お染めの前に姿を見せた金蔵。やりとりの後、隠れる。そこで、親分が登場。金蔵は土左衛門で上がったと金蔵の位牌を見せる。迫真の演技に、あれは幽霊だったかとお染めは、青くなる。このままだと金蔵の祟

りがあるぞと脅かす親分。緑の黒髪をぷつぷり切ったあげくに回向料五両を差し出す。再び目の前に現れた金蔵に「よくもだましたわね」。下げは「てめえがあんまり客を釣る(だます)から比丘尼(比丘ニ魚籠)にされたんだ」。

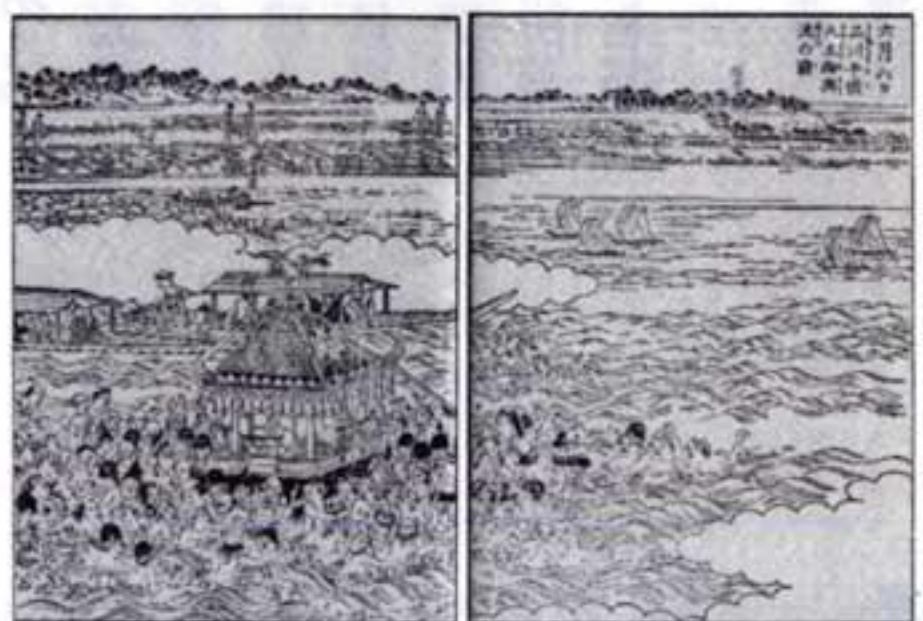
牛頭天王社(品川神社)、東海寺に参詣

土蔵相模を過ぎ、右手、御殿山に向かう鳥屋横町、大横町通りを過ぎると細い道がある。右に曲がり、この道を進むと突き当たりが善福寺で一遍上人が唱えた遊行念仏の時宗の寺。鎌倉時代からある古刹である。寺前は小規模ながら門前町を形成していた。街道に戻って、直ぐ隣の右側、御殿山に向かう太い道が黒門横町で、曲がって進むと善福寺と法善寺の塀に挟まれ、正面が御殿山。善福寺北塀なりに左に曲がる(この道は現代も残っている)。すると東海寺参道に出る(第一京浜)。南に向かつて右手に牛頭天王社(品川明神社、

現品川神社)。隣接して東海寺。東海寺中門(黒門)を潜ると門前町、広場。広場の西面は、東海寺額門、車門が並列。東海道から人々はこの参道を歩いて、品川明神、東海寺に参詣した。

東海寺参道(第一京浜)から牛頭天王社(品川神社)の鳥居を仰ぐ。上り龍、下り龍を彫ったこの鳥居は、慶安元年(一六四八)、東海寺造営奉行堀田正盛の寄進によるもの。都内では上野寛永寺東照宮鳥居に次ぐ古さである。鳥居を潜り、長く急な石段を登ると広い境内。正面に社殿、左側に宝物殿がある。神社の歴史は古く、文治三年(一一八七)源頼朝が安房の国洲崎明神を勧請したことに始まるという。この神社は東海寺造営の際には予定敷地内にあった。それを現在地に移転させたのである。牛頭天王社は北品川宿の鎮守であり、東海寺の鎮守でもあった。その祭礼、牛頭天王を祭る天王祭は有名で南品川の鎮守荏原神社の南ノ天王祭に対して北ノ天王祭と

◆品川神社



◆江戸名所図会 牛頭天王社神輿洗いの図

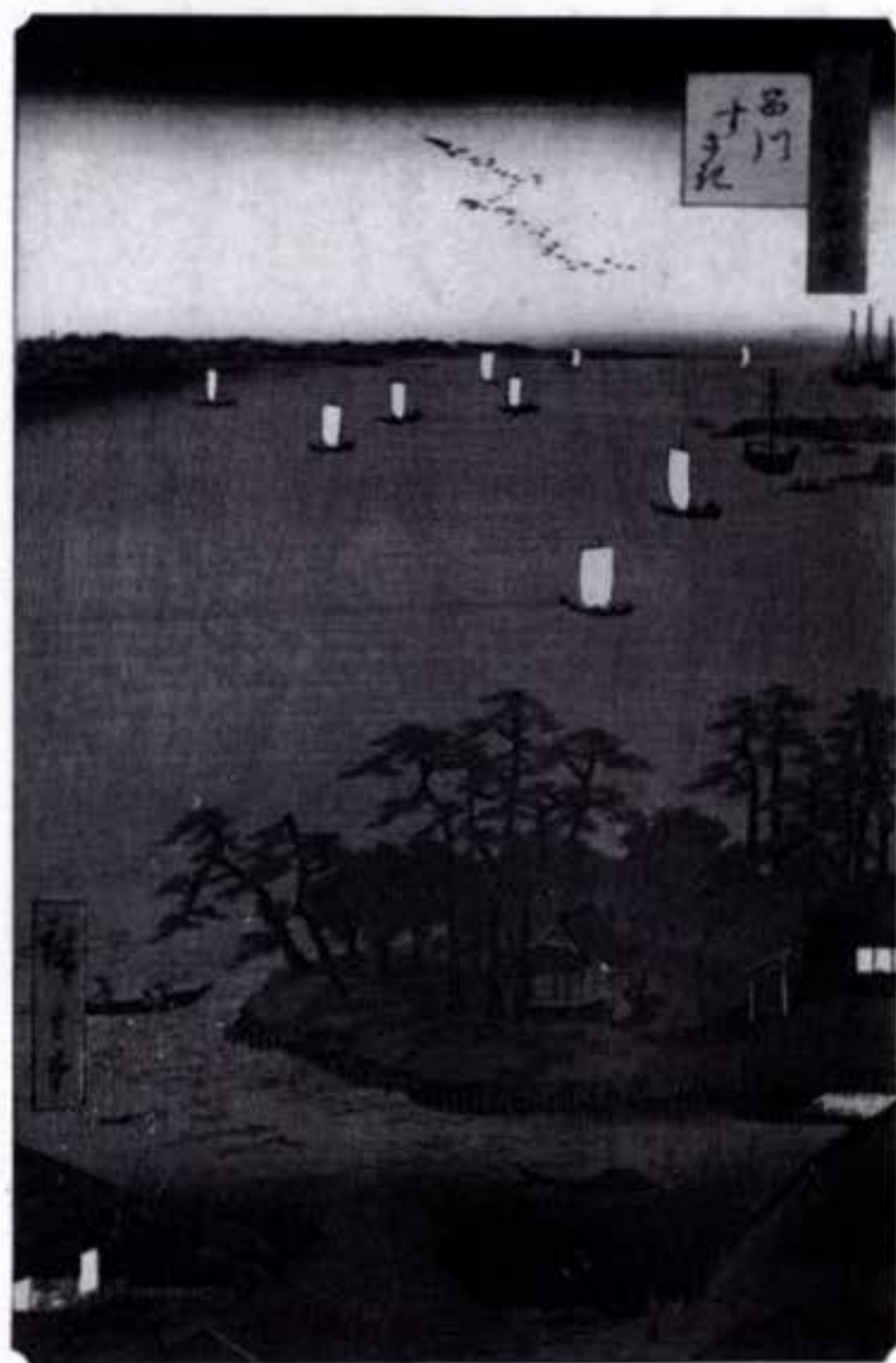
呼ばれた。見物は千貫御輿の渡御。力自慢の若者に担がれた御輿はこの急な石段を降り、北品川宿を品川拍子（囃子）にのって練り歩き、海に出て豪快な神輿洗いを行った。

境内の東南隅には「品川富士」と呼ばれていた富士塚がある。江戸期方々に造られた、富士信仰、富士登山できない人々が気軽に代信仰するための塚である。社殿で拝み、富士塚に登って拝む。社殿の後ろ、南に行くと自由民権運動の指導者、「板垣死すとも自由は死せず」の名言を残した、板垣退助の墓がある。墓はもともと東海寺の塔頭、高源院にあった。同院が移転したため墓だけが残されたものである。

目黒川の蛇行、州崎

再び街道に出る。両側に並ぶ旅籠、妓楼（遊郭）、貸座敷、料理屋など数百軒。江戸から出る者、帰る者の逗留の宿場。北品川宿を南に行くと、目黒川にぶつかる。中の橋。江

戸時代の目黒川は、現在と異なり、大きく蛇行し、東海寺南面をなめると、北に迫り上がり、貴船明神社（荏原神社）の北側を通り、中の橋から北品川宿の海側を巻くように北上。そして川の海側は州を形成し、牛の舌のような地形を形成。州崎の漁師町。ここの漁師は、幕府に魚を献上する特権を持っていた。



◆品川州崎 広重画 左下、土蔵相模 中央に州崎弁天社 右下、目黒川にかかる鳥海橋 帆立舟が漁をする、右上にお台場

州崎の北端には、州崎弁天社。目黒川の鳥海橋を渡り、弁天社に参詣。川は、御殿山の正面、東方に位置する、お台場方面に流れ出ていた（昭和三年に河道変更）。妓楼や料理屋から眺める景色は正に絶景であった。

目黒川は古代、海の入江のようなもので、それが次第に川となり、品川の地形を造った。もっとも縄文前期一万年前の海岸線は、品川から大森先までの幅がそのまま埼玉の大宮大地の先まで（大宮、栗橋）続く海の入江。すなわち、現在の京浜東北線が当時の海岸線であった。有名な大森貝塚を初めとする埼玉に至る、貝塚群がこれを証明している。とにかく目黒川が品川を造った。品川の地名はこの土地を古くから支配していた豪族、品川氏からきているという（『吾妻鑑』）。しかし、品川とは目黒川のこと、古くは目黒川の下流を下無川しながわと言ひ、砂川のなまりともいう。

寺町南品川宿

東海道。左に本陣（大名の宿泊所）を見て、目黒川に架かる中の橋を渡ると、ここからは南品川宿である（江戸時代の人々は「橋向こう」と称した）。渡った右手に貴船明神社（荏原神社）があり、南品川宿の鎮守。神社の歴史は古く、奈良時代にさかのぼるといわれている。江戸期、南ノ天王祭りは神輿の海中渡御とぎよでクライマックスを迎える。社やしろを出発した神輿の行列は、街道を南下し、南品川宿を抜け、妙国寺、品川寺、鮫洲の海晏寺門前町を通り、大井村との境界線まで練り歩く。ここから海に神輿を入れ、波に洗われながら北上し、再び神社に戻る。海岸は大勢の見物人で賑わった。

目黒川を堺とする、南品川宿を南下すると、右手、街道の西側台地一帯は数多くの寺社が大井村まで連綿と続く（仙台坂道が境界線）。目黒川南一帯は、貴船明神社に始まり、海徳寺、本覚寺、心海寺、本栄寺、蓮長寺、妙連寺、本光寺、天竜寺、大竜寺、そして清光院

と川に沿って西に広がる。これらの寺社は敷地規模こそ縮小されているが多くは現在も存在している。さらに街道に沿って南に願行寺、常行寺、長徳寺、妙国寺と連なっている。江戸期の人々はこれらの寺社を右手に見ながら、歩いた。品川とは寺社が集中して存在している寺町でもあり、江戸期の繁栄を示している。妙国寺（天妙国寺とも称す）の敷地はとりわけ広大である。弘安八年（一二八五）日蓮の直弟子、天目上人開基。品川の豪族、品川八郎三郎国友が社領を拡大。天正十八年、家康江戸入りの際には当寺に宿泊。寺領と朱印状を交付。二代秀忠は家康が駿府から江戸に来るときには、決まってここで出迎えた。三代家光は訪問すること三十数回。五重塔、書院、仁王門、総門を新築。現在の本堂は十七世紀末の建築と言われ、堂々たるもの。墓地には古い墓石が並ぶ。鐘楼型のお祭り佐七、板碑型の剣豪伊藤一刀斎、歌舞伎「与話情浮名横櫛」の、斬られ与三郎、お富の墓、浪曲

◆妙国寺



師、桃中軒雲右衛門の巨大な墓。街道の両側は妙国寺の門前町となっている。街道に接して諏訪神社がある。妙国寺の鎮守であった。ここを過ぎると品川寺である。品川寺は大同年間（八〇六―八一〇）の創建で真言宗別

格本山。街道から入り口に立つと左側、台座の上に、高さ二メートル七十五センチの大きな地蔵菩薩が見える。これが江戸六地蔵の第一番。江戸六地蔵は、深川の住人、地蔵坊正元が、江戸の民衆から浄財を集め、旅人の安全を祈願して街道筋に造立したものである（二七〇八）。江戸の入り口六カ所に設置。第一番品川・品川寺、第二番浅草・東禅寺、三番新宿・太宗寺、四番巢鴨・真性寺、五番深川・靈巖寺、六番深川・永代寺。人々は、地蔵を拜んで、東海道を南に下った。また、江戸に入る時、旅の無事を感謝した。品川寺の寺門を潜って右側に樹齢六百年に及ぶ大イチョウが聳える。太い枝から涎のように垂れ下がった枝根は、歴史と生命の凄さ、そのものを感じさせる。江戸時代の人々は皆この木を眼にしたのだ。



◆品川寺六地蔵と大イチョウ

【参考文献】

- 『品川区史跡散歩』平野栄次著 学生社
『江戸名所図会』角川書店
『広重の大江戸名所百景散歩』人文社
『広重の東海道五十三次旅景色』人文社
『江戸明治東京重ね地図』中川恵司



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●切符

〔特選〕懐手バス来て切符まさぐりぬ

浜口 佳春

もうすぐバスが来るといふ時は、切符を握ったまま懐手をしているのだろうが、これは持っているうちに手を開いていたのか。バスの姿が見えて来て、ポケットをまさぐっているのである。あわてなくて済んだかどうか。

〔佳作〕鳥雲に離郷の切符握りしめ

片桐てい女

インドへの片道切符朧月

鈴木真理子

車掌に買う切符大きや窓に雪

石原 新

●歌

〔特選〕鼻歌はロシア民謡花の昼

鳥羽 梓

いつの頃か、ロシア民謡のはやった時代があったように思う。だから思わず口から出て来たとすれば、年齢はある程度察しられるか

も知れない。それはさて置き、あちこちに花の咲くうらかな一日である。

〔佳作〕御詠歌の声立春の風に乗り

河合富美枝

雛の座に孫と歌いて童女めく

佐藤 雅子

茶房にて少女が歌う春の川

山口 信子

●自由題

〔特選〕バスタオル初湯出し子をもみくちやに 二丁田美恵

一緒に入った子を母が祖母に渡す。タオルを持って待っていた祖母は、体中を拭いてやる。「もみくちや」は髪を拭く様子だろう。ここが句を面白くした。初湯を里帰りした家でのこととしたいのだが、どうだろう。

〔佳作〕春泥の乾きし旅行鞆かな

井口 吾郎

樟脳の匂いが消えぬ内裏雛

立神 貞華

光りつつ翳りつつ川春めきぬ

池田 伊吹



坂指自由題

兼題
(季語ではありません)

浄土誌上句会のお知らせ

切符

春の夜や切符の半分貼る日誌
初旅の青春切符ポケットに

井村 善也
河合富美枝

春酣幸福行きの切符買ふ

中島富士子

鳥雲に離郷の切符握りしめ

片桐てい女

春コート見送るための切符買う

立神 貞華

二ヶ月の埃は出ても切符出ず

井口 栞

ふらここを漕ぎて片道切符かな

狭山 掉

ひとひらの落花は黄泉へゆく切符

和田 仁

春風や無人の駅に置く切符

千田 敏郎

歌

閉校の最後涙の卒業歌

洪口 佳春

ハミングで歌ふ少女の早春賦

河合富美枝

締切・二〇〇七年五月二十日

発表・『浄土』二〇〇七年九月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

棟梁の木遣の歌や春の雷

中島富士子

雛の座に孫と歌ひて童女めく

佐藤 雅子

涙声喜寿緊張の卒業歌

工藤 浄真

轉や歌手の祖として白拍子

片桐てい女

雛の日の園児らの歌ミソファミレ

坂下 優子

鼻歌が春のあくびとなりけり

狭山 掉

自由題

味噌汁の葱青々と春立ちぬ

河合富美枝

路の墓ほろにがかりし常の世は

佐藤 雅子

わが影のバスに轢かるる冬日かな

寺下 忠至

芽吹かんと土もり上げる庭の隅

中村 真一

春宵や白衣びしと当直医

片桐てい女

梅白し年とるために生きのびる

和田 仁

遠くより来たる顔した女難かな

狭山 掉

捨て置きし鉢よりこぼる瑠璃の春

鈴木真理子

蓬萌え鉄道殉難碑黒し

板橋 東人

なにかも刻んでしまひ雛の日

十条 苑を

桃咲くや京成電車のつきあたり

目黒 裕

奥の間にひいなのだきし仏具店

鳥羽 梓

白酒を注ぐ母の指太かりき

山本 勝之

さやさやと風とたわむる吊るし雛

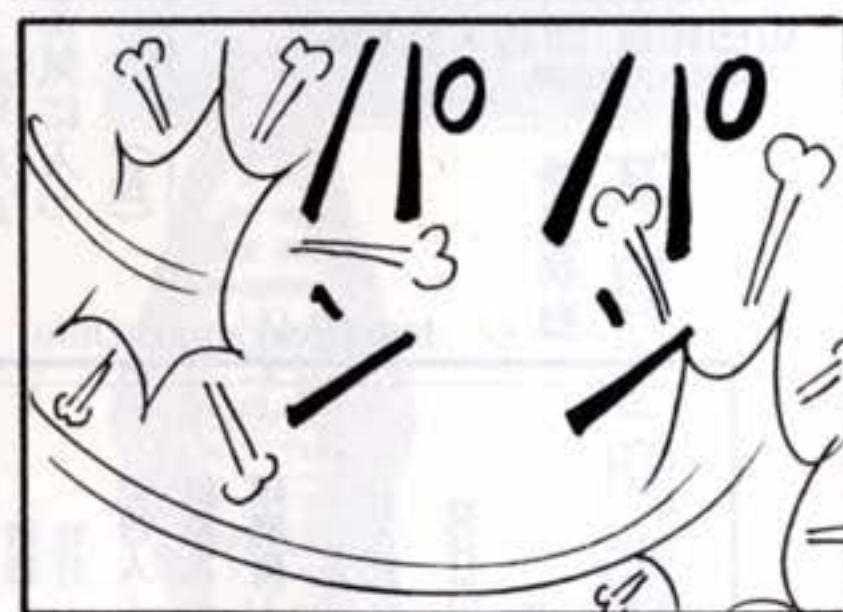
坂下 優子

さっちゃんねネッ

40

かい

かまち♡よろう



編集後記

誘われて白寿の翁藤の花

岱潤

最近のテレビで、よく細木数子氏の宗教儀礼に関する言動が、話題を呼んでいるようだ。私は全く興味が無く、そうした番組を見ないので知らなかったのだが、「お正月にお寺参りはするな」とか、「お墓に水を掛けてはいけない」など、看過出来ない言動もあるようで、先日週刊誌でも取りあげて、各本山などにも伺い、そうした言動が仏教とは関係のない『細木教』であると断定していた。しかし、その週刊誌では、お墓に水を掛ける宗教的理由を、残念ながら説明していなかった。

この「お墓に何故水を掛けるのか」と

いうことは、実はとても難しい問題で、大分以前だが調べたことがあった。巷に多く出ている安易な『お参りの仕方』等の説明書では、ほとんどが神道での「水垢離」などを例に挙げて、洗っているという説明で終始している。しかし、それでは参列者全員が、水を掛けてからお参りをしていることに説明がつかない。仏教ではやはりあの水は「闍伽」と理解し、墓前に捧げる供養の水とするべきであろう。以前読んだ本では、お墓に掛けた水に限って「餓鬼」が飲むことが出来る、つまり施餓鬼行為であるという説明があった。この説明が私は実は一番気に入っている。

(長)

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
臈博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十三巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十九年 四月二十日

発行

平成十九年 五月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇二六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

※シネマ随想はお休みさせていただきます。

耳目開明

耳目を開明す
無量寿経

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

体験に勝る学習はない。
不明なことが雲散霧消して、
明瞭になる。

ミャンマーがまだビルマと呼ばれていた一九七三年一月二六日、私はマンダレーでビルマ僧になりました。「サーサナヴァンサ」というビルマ上座部仏教史を翻訳していて、ビルマ僧の生活を深く知る必要が生じたからです。

托鉢では僧はお礼を言いません。人々が「通りかかった」僧に託して仏に布施する意味だからで

す。僧は通肩式つうけんしきと称する両肩を覆う着衣をします。托鉢は修行の一部。御飯とおかずは区別して受けます。おかず用にタバコ缶のような入れ物四、五个予め用意します。僧院に帰ると少しずつ御飯とおかずを本尊に差し上げて、残りを僧たちがいただくのです。衣を通して重い鉢の御飯の温かみから、人々の信心の深さを本当に知りました。

法然上人鑽仰会の

本

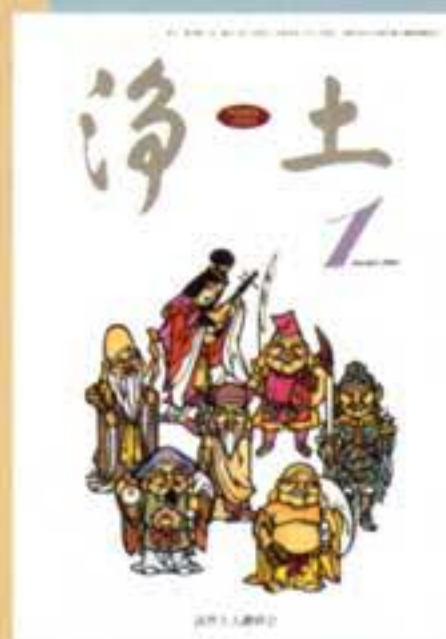


『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



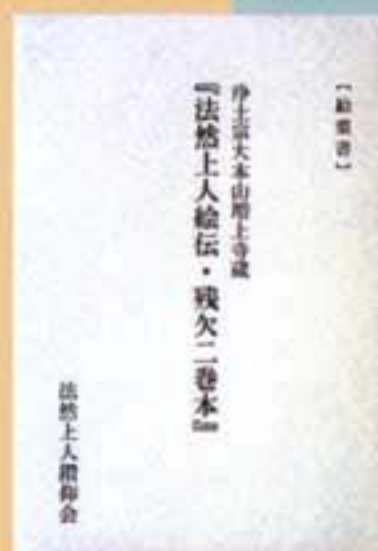
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



「ブッダ
知れば知るほど」
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036